〈近世女性史資料(15)〉

# 教訓躾方 女今川姫小松 (3)

## ── 書誌・翻刻 ──

黄　色　瑞　華*1
若　林　俊　英*2

## 一　書　誌

所蔵　城西大学国際文化研究所

書型　半紙本一冊。縦二五・五センチ。横一八センチ。

表紙　厚紙の上に縹色無地極薄紙を貼る。ただし、湮滅甚だし。

題簽　左肩。白紙四周枠。縦二〇・五センチ。横三・八センチ。教訓躾方　女今川姫小松　全

綴糸　茶色絹糸一本掛。

内題　なし。

丁数　全六〇丁。ただし二丁～三丁は落丁。

各面　不揃。

匡郭　縦十八・三センチ。横十二・二センチ。

柱刻　口ノ一～口ノ一一（口ノ二～三落丁）。

本文、十一～十九。二十ノ五十一～六十九。七十一ノ百一～百二十一。

奥付　文化十四丁丑八月吉日

書林　江戸　日本橋通壱町目
須原屋茂兵衛
大坂　心斎橋通北二町目

（以下湮滅）

## 二　翻　刻

凡例

1　『教訓躾方　女今川姫小松』の忠実な翻刻を旨とする。

2　使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるように配慮する。

3　漢字ルビはすべて原本のままとする。

4　行移りもすべて原本のままとし、丁移り、表裏の別は、「一オ・」一ウを以って示す。

百七』ウ・上段

染物のひでん

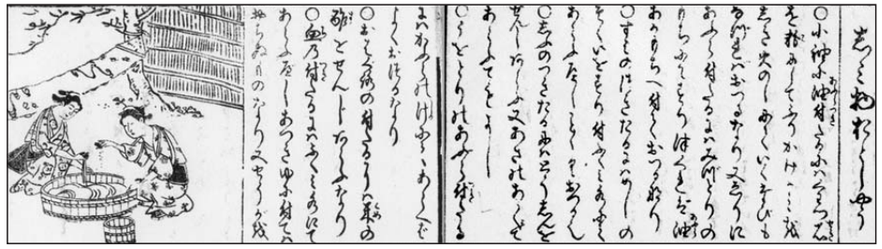
○すゝたけいろにハ□いしを粉
　にして水にときたてふのりを
　すこしくわへ二へんそめてよし
○きちや色にハ□□□のせんじ汁
　にて一へんそめそのうへをもゝかハの
　せんじしるにめうばんすこし入
　又一へんそめてよし
○紅粉うこんハ下をうめにてそめ
　其上をすわうをせんしうすく
　してめうはんすこしくわへて
　二へんそめてよし
○ふぢ色ハあかね□むしやしや
　きのあくとおはくろすこし
　まぜ二へんをそめてよし』百七ウ
○うすねすミハ松のちゝりか又は
　なすびのきのからをやきすみと
　なしてすり鉢にてすり水に
　ときてそむべしかわきたるあとを
　水にてあらふべし
○くろちやそめはもゝかわにて
　四へん染とめにだしかねに
　めうはんを入てそむべし
○あかね染はあかねにめうばん
　少し入て三べんそめとめに
　□りやすをせんじそめていろ
　よくなるなり
○よろつそめしる手にしミたるハ
　すにてあらふへし又梅すもよし
　あいのしミたるハいわうはなのけ
　むりにてふすべおつるなり』百八オ

しミ物おとしやう

○小袖に油付たるにハくわい石
　を粉にしてふりかけかミを
　しき火のしにていくたびも
　なづれバおつるなり又ゑりに
　あふら付たるにハみづとりの
　もちにてすりつくれば油
　あかもちへ付ておつるなり
○すミのつきたるにハめしの
　そくいをすり付ふくミ水にて
　あらふへしこと〳〵くおつる也
○しふのつきたるにハとうしんを



　せんしあらふ又あさのあくで
　あらふてもよし
○うをとりのあぶら付たる』百八ウ
　にハかふらの汁にてあらへば
　よくおつるなり
○おはぐろの付たるにハ米の
　酢をせんじあらふなり
○血の付たるにハふくミ水にて
　あらふべしあつきゆに付てハ
　おちぬものなり又せうがを
　（図、略）』百九オ
　へぎ上におきてもせうかに
　うつりとるゝものなり
○うるしの付たるにはミそ
　しるにてあらふべし
○たはこのやに付たるにハしろ
　さとうをせんじあらふべし
○白きもの茶のしミ付たる
　にハめしのとりゆにてあらふ
○白きもんなとあかばりふる
　びたるにはだい〳〵のしるをすり
　つけてあらふてよし



百八ウ～百九オ

○ねすミねこいたちなどにへん
　かゝりきハつきあしき香の
　するハ石はいをあつきゆに
　入かきませ二三へんふり付け
　あらふべしあとを水ニてすゝぐ』百九ウ

妙薬秘方

○帯下にて腰つよくいたむ
　ときは灯心をまめほどに丸
　めて酢にて用ゆべし
○さん後にこしあしはれたる
　には三年ほどになるほし
　葉をあたゝめ下にしくべし
○産後おりもの滞る時は
　なすびのへたをくろやきにし
　てのりにおしまぜ右のあしの
　ひらにはるべしおりたらバ
　ぬくひはかすべし
○乳のはれたるにハあかにしの
　からをやき粉にしてすにて
　とき付るべし』百十オ
○あとはらいたむときハまつ
　たけのいしづきをせんして

のむへしきめうなり
○子とものみゝたれ出るにハくまの
ゐを水にときさしてきめう也
○おなじくみゝからみうづく時ハ
朱をこよりに付さしてよし
○子ともかミの中にかさてきたる
ときふるきくしかきくろやき
にしてごまのあぶらにてねり
つけてかくはやくなをる也
○白くぼのくすりハせんきいし
ほしかふらくろやきにして
ごまのあぶらにてねり付てよし
○とり目にハ朱ゐのきもをうすみ
そにてたきもちいてよし」百十ウ

## 手ならひの事

文字といふことハもろこしに蒼頡といふ人鳥の足あとを見てはじめて文字をつくり出し給ふこれより手をすこし書ことを鳥の足あとをまねふといふなり文字に真草行とて三いろあり行文字を

」百十一オ

やハらげて弘法大師女のためにいろはといふ事を四十七字のかなに書いたし給ふこれを女文字といふなりいろはさへ書おぼゆれハ無知の女も哥ざうしをよみてむかしの事をしり文玉つさを書てわか心を通じ用をとゝのかふよつて手ならひのはじめハまづいろはより書ならひのちにハ文章をつらね男文字をもおほゆる也まことに人々むまれて手を書ぬハ盲目明□におなしたとひ筆うるハしからずともよく文章をつらねよく文字をよむことを第一とすへし能書にてかくあらんハ元よりの事也むかしの名有女中手をかき文をつくらぬハ」百十一ウ



まれなりうるハしき手にて文章おもしろく書たる文を見れバその人を見ねともすかた心ばへまてやさしく艶におもひやるゝものなり其ためにてならひ給へといふにハあらねと水ぐきのあとを見て男の心をよせたるためしむかしも多事なり

」百十二オ

みめかたちうつくしくても手のつたなきハ人の心おとりせらるゝもの也されハ女中の藝の第一ハ手かく事なりあさゆふ心がけ給ふへしある人小野道風といふ能書のかたへてほんかきて給ハれと所望しけれハ古筆を箱に入てやられたり古筆ハのそみにあらず手本の事也と申遣しけれは道風とのたまいけるハ此ことく古筆のつもるやうに心に入てならひたまへと申されけるとなり
一女中ハかりにも男の手跡ならふべからず筆たてするとに見へてあしく女筆のよろしきをならふべし文章ハ御所かた武家がた奥方の能筆にならふもよし」百十二ウ

## 三味線の事

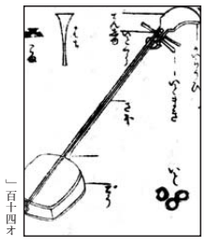
三味線ハりうきう国よりわが朝にわたりたけれどもその音淫乱にして楽器にいらず遊女のわざとなれりゆめ〳〵引ならひ給ふへからずされともその所〳〵の名ハおぼへたまふべし
一たう　一さほ　一かいらうひ
一いとくら　一てんじゆ　一ねを
一さるを　一ちふくら　一うたぢ

## 琴の事

一琴ハ楽器の一つにていにしへ聖人賢人これをもてあそびたまひもろこしわがてうともに

女のたんする物にしてむかしハ」百十三オ
名人おゝくあり琴にハ十三の組
ありすがゞきりんせつ鹿をどり
などの乱曲あり女中ハよく
ゑんずる事ならずハ調子の
あわせやう琴の所々の名なり
とも覚へ給ふへしむかしハ琴の
弦五十すちありのちに数を
へらして今の琴ハ十三筋あり
むかふの方よりかぞへて十三すぢ
のうち十一をとゝいふ十二をいといふ
十三をきんといふ右の方の高き
所をりうかくといふ同こぐちを
りうせつといふ左の方のたかき所を
うんかくといふ右の龍角のうへに水
引のこよりあり枕糸といふ左
の方にかしハな□のほりものあり」百十三ウ
かしわ板といふそのはたに段子
はりてありこれをりう絹と
いふいとゝをす座ありしとゝめと
いふ左の方のうらにあなあり
ゐんけつといふ右の方のうらに

あなありまつかたといふなり
両方のあしをむかてあしと
いふこたを頂といふ引をたん
ずるといふ


」百十四オ

貝おほひ
哥かるたの事

貝おゝひする事源氏物がたり
をおほへ給ハねハおふ事なり
かたし源氏の心をかい一対に
書てかたしをまき貝として
あハせとるなり貝おゝいといふべし
貝合といふべからず
○哥かるたハ百人一首の哥を
上の句下の句をかきわけて
下の句をまきかるたとして上の
句をぎんして合せとるなり



うたかるたをうつとハいはずつい
まつをとるといふへきなり
なりひら朝臣いせの斎宮をおくり」百十四ウ
しわかれのとき斎宮のうた
よりさかづきの皿に哥の上の句を
書ておくり給ふ
　かち人のわかれとぬれぬえにしあれハ
とあればなりひらそのさかつき
のさらにつゐまつのすミして
　又あふ坂の関はこえなん
と下の句を書付ける事伊勢
物かたりに見へたりよつて哥

」百十五オ

かるたの上の句下の句をわけ
たるをつい松といふなりつい
まつといふハたい松の事なり

香をきく事付たり十種香

一盆に香炉をおくこと香炉ハ
中からはこハ左香はしハ右にを
くへし三つかなハのこゝろへなり
一香炉の火ハたんどんにて取べし
たんどんやきやうの事くるミの
から松かさ二味をよく〳〵やさうす
のりにてかためて用ゆべし
一灰をしやうの事ひしかたに
おすべしいつれもおしきりの
所を長にをすべし半にハいむ事也
一たきものゝときハ灰をおさず」百十五ウ
してぎんばん□かりにてたくべし
又たきものをたきてのち沈を
たくべからず
一かうろを人のまへにいだすときハ
おもてへかうろのあし二つむけ
ておくべしあし一つさきへなすべし
一火かげんの事はしめハすこ
しつよくとりて真那斑などの

」百十六オ

あしき香をきゝて火あひよく
なりたるときよき香をきく
べし火つよきときハ香をぎん
ばんの真中におかずかたすミにおく
べし衛士籠のときハ火すこし
つよきもよし又そらたきにハ
きんはんをおかぬなり
一香炉に火をとりて香炉あ
つくしてもたれぬときハきれ
いなる物に水をいれてかう
ろを三分はかり入ひやすべし
一香をきくに左のゆび三つは
かうろのそこにあり人さしゆひ
ひとつわきにはづるゝやうに
もつなり
一香をきくハ上座よりきゝ」百十六ウ

てひととをり返りて又おし
かへしひとゝをりとをし二
度つゝきくなり人数十人
よりうへハ一とをりにておく
べし
一十種香といふは香盆に
香の名を書たる札と筒と

」百十七オ

をそへいだすをいつれのかうと
いふ事をきゝおほへて札の名
をたつね筒へ入るなり
一香をきくにはないきあら
く手にてかほりをまねき
かけ手をかさしなとして
きくへからすことに女中な
どハ見くるしきものなり
たゝ何となくそのまゝきゝ



たるハよきなり
一香をきくときゑんに居
ともうちへ入てきくべし
風をいむゆへなり座にて
あふきつかふへからず
一香のあとにて龍延香又
かすが野そのほか焼もの」百十七ウ
なとたくときハきんはんを
かへてたくなり名かうきゝ
たる銀ばんにてたくべからず
春日野をきくときこゝろへ
あり四五人めをまハるときは
しりてとぶ事有なり
一香ハ一たきといふへからす
一炷といふべし

香會　香品がハり名

小鳥香　花月香　競馬香
源平香　宇治山　系図
住吉　小ぐさ　玉つた
更科　野々宮　蟻通香
此外名多し十種香を□□□也
すこしつゞちがひいつれもこゝろミ
なし也但しその時の興による也」百十八オ

懸がう名方

一龍脳　五分　一麝香　五分
一丁子　二匁　一甘松　一匁
一白檀　一匁

同新まくら

一ぢんかう　四匁　一てうじ　一匁
一甲香　一匁　一くんろく　三分
一びやくだん　二分　一じやかう　二分

同蓬生

一じやかう　二匁　りうのふ　三匁
一まつくわ　五匁

同あやめ

一沈香　二匁　一龍脳　三匁
一丁字　二匁　一白たん　三匁
一じやかう　四分　一林松　八分」百十八ウ

薫物の名方

仙家

一ぢんかう　二匁　一丁字　二分
一丁かう　二朱　一白檀　一分
一くんろく　二朱　一林松　一朱
一麝香　一匁　一梅霜　五匁

一焼塩　五匁　一蜜

』百十九オ

若草

一ちんかう　八匁　一丁香　三匁
一　貝　一匁　一白だん　二分
一くんろく　一分　一麝香　一匁
黒方
一ちんかう　二十匁　一丁香　二匁
一甲香　二匁　一くんろく　一匁二分
一麝香　二匁　一白だん　五匁二分

ひいな祭の由来

○三月三日ハ巳の日のはらひと
て女子のひいなあそひハもろ〳〵の
やくなんあしき事をはらふ
あそびなり源氏物語若むら
さきの巻にむらさきのうへの御
ときにげんしの君の御すがたを』百十九ウ

ちいさくひいなにつくり清らか
なる衣服をきせて男ひいな
と名つけ女ひいなハミづからと
名づけ夫婦まめやかにむつまし
ていをまなびうつして源氏の君
につかへまいらするよそおひをなし
てあそびたまふ女はたかきいやし
きともに一たび嫁してハおつとに
したがひふう婦の中むつましく
内をおさむるを女のつとめとす
るなればおさなきうちより
そのさまを手ならハしむる
事なり
○三月三日ハ巳の日のはらひ
とてもろ〳〵のやくなん
をはらふあそひなりそのかミ』百二十オ
天照大神の御子少彦尊とハ
いとちいさきく姿も御親の
ゆびの間よりたちたまふ神なり
これ日本にて医者の祖神なり
されハもろ〳〵のやくなんひやう
なんをはらふ日なれハ此御かミを



まつるひいなハ此神のちいさくまし
ますをとりてちいさくもの〳〵を
作りてやく病をのそかんために
この神まつる也いまきのくに淡嶋
明神をひいなつまりの事となすも
此かミハ少彦尊この御神ハ心も
ちいさくかたちもちいさくして
しゝみがいのかた〳〵にめしてあら
はれ出給ひし御かミなり
このゆへに絵馬にひいなをあくる也』百二十ウ

かなづかいの事

およそものかくにかなづかひと
いふ事をわきまへしるべし
たとへハ恋といふかなハこひと
書鯉といふかなハこいと書也
あるいハほををとよむ事あり
正字のこゑをはねてよみたる
ハおとよむなりしほ塩
いほり庵　かほ顔　いはほ巌
あさがほ槿　大がい此たくひ也
いろはのはしめのををかく
ハ小の字のたくひなり

をぶね　小舟　をしま　小嶋
をがわ　小河　をしほ　小塩
をさゝ　小笹　此くらひなり』百二十一オ
いろはのをくのおをかくハ大
乃字のときかくなり
おほそら　大空　おほゐ川
大井川　おほへ山　大江山
いろはの中のえをかくハ中を
ゆとよむ字にかくなり
こへ　越　おほへ　覚　此たぐひ也
同をくのゑをかくハ　こゑ　声
いゑ　家　すゑ　末
松かえ　松か枝　梅かえ　梅か枝
なとにハえの字をかくへし
同はしめのいをかくハ下をいと
声によむ字にかくなり
らいはい　礼拝　ない〳〵　内々
大かた此たぐひなり数多なれ
はこれをりやくす何も此かくなり』百二十一ウ